

田中文雄編『冥府考―死者の世界』

吉 田 隆 英

ミサイルと空爆さらに砲撃によって破壊され、瓦礫の廢墟と化したウクライナの光景に慣れっこになっていた我々は、ガザで再び同様の惨状を見せつけられ、夥しい死者と泣き叫ぶ負傷者の姿はまさに地獄繪圖の再現であるかのように感じられる。そうした折に日本道教學會

(以下、本學會)理事で眞言宗豊山(ぶざん)派總合研究院現代敎化研究所長の田中文雄師が、「死者をめぐる諸相や諸問題」を探るために企畫された『冥府考―死者の世界』(以下、本書)が、總計六八六頁の大冊として刊行された。本書はもともと豊山派の關係者が、混迷する

現代における敎學の再構築を目的として編まれたもので、冥府篇・境界篇・現世篇の三篇からなり、宗派外の研究者も含め、のべ二五名もの幅廣い領域の協力者が執筆されて、まさに壯觀であると評せよう。

宗派當局の基本方針としては、現世篇における現代敎學の礎となる指針の確立が最終目的ならんと推察されるが、そのための基礎として冥府篇と境界篇を設けられたのは、編者田中師の慧眼を物語るものと言え、まず古い時代の基層から土臺を固めんとされたものであり、本評においてもその二篇を中心にして論じてゆくこととする。

冥府篇の冒頭は田中文雄所長の「冥府の審判―佛教と道教の十王信仰と儀禮」。表題のとおり中國における冥府の概念について、泰山信仰に始まる傳統を丁寧な解説されている。そもそも怪力亂神を語らぬ儒教においては、死後の世界や冥府といった意識は乏しかったが、西暦紀元前後に佛教がもたらされ、輪廻と地獄という新たに輸入された概念は、漢民族に精神面で大きな衝撃を與えた。そうした経緯を十王信仰の受容と共に、圖版を混じえてわかり易く解説されているのは、道佛二教の歴史と儀禮に詳しい筆者ならではの言えよう。

それに續くは田中純男稿「古代のインドにおける生と死そして不死」。インド最古の文獻資料「リグ・ヴェーダ」は紀元前千二百年頃には成立し、そこでは既に死後の世界が明確に意識されており、太陽神の子ヤマは神であり死者の王とされてはいたが、はじめは冥界の王という位置づけではなかった點が注目される。

次に野口圭也稿「死體は衆生か」。この意表をつく表題は日本佛教の性格を考える上での重要な視點でもある。

筆者はジャイナ教とインド佛教を出發點に、日本の即身佛やチベットの例をもあげ、日本佛教では死體も衆生とみなしている、と言えると結論づけている。

續いて本學會理事の菊地章太稿「祇園精舍無常院―傳承の系譜と傳播の軌跡―」。インド、コーサラの舍衛城近くの祇園精舍内にあった高齢や重病の僧侶が靜かに臨終を迎えるための施設、無常院につき唐の道宣の『祇洹圖經』にもとづいて紹介し、源信の『往生要集』でも道宣の記述を引いており、淨土信仰を前提とする作法の存在を確認した上で、儒教經典の『儀禮』『士喪記』にある士人の喪禮の作法と比較して、その基本がほぼ一致するという驚くべき事實を明らかにし、古代儒教の葬送儀禮と、道宣が大成させた律の規範との類似性と共通性を指摘した注目すべき論考である。

その次は、かねて洞天福地研究會を主催されている本學會前會長、土屋昌明稿「洞天福地と冥府に關する覺書」。道教の聖地とされる洞天福地の説は唐の司馬承禎に始まるが、その地と「冥府としての地底概念」との近

似性を指摘した田中文雄説によりつつ、何故に神佛の福地と死者の冥府が結びついたかを説明せんとした論考。

『西遊記』六八回に登場する酆都城判官崔珏すなわち崔府君が冒頭の一〇回で既に登場し、太宗の地獄めぐりの案内をしていることに注意しておきたい。筆者によれば酆都のことは陶弘景の『真誥』や葛洪の『抱朴子』にも見えるとのことで、東晉の頃には死者は酆都山へ行き、そこでは鬼神が支配していると考えられていたことが理解できる。

更に笹岡弘隆稿「日本における死者の世界」。筆者は「他界」をキーワードに、佛教以前、『記紀』『萬葉』の時代、佛教思想普及後と時代を分け、『日本靈異記』『往生要集』にもとづき他界觀の變化を見、『往生要集』の地獄の描寫が與えた影響に着目、佛教の本格的受容と社會の變動が他界淨土觀念の變質をもたらしたとする。その上で日本で布教した外國人宣教師の報告にも注意して、日本人の他界觀が外來の宗教思想を受容しながら、時代と共に變容しつつ今日に至った、と述べる。

森瑞枝稿「冥途の生―修羅能の幽靈―」は、シテ方金春流の能樂師にして大學講師も兼ねる筆者ならではの、能樂に登場する幽靈の考察。武將の亡靈を主役とする修羅能の代表作で人氣作でもある「清經」を分析して、豊前柳が浦で入水した平清經（シテ）が幽靈となつて都に残る妻（ツレ）のもとに現れ、自分の身の上を語った上で成佛するという、『平家物語』にもない幽靈譚が實は深く繊細な死生觀を内包する作品であることを明らかにし、誰かの死をシミュレーションしてきた日本の傳統を再確認しており興味ぶかい。そう言えば「泣不動」はじめ能に登場する幽靈の何と多いことか。シェークスピアの比ではない。

冥府篇掉尾は白石凌海稿「他界觀覺書―死の氣づきと佛教世界―」。筆者の幼時體驗から、釋尊が出家を決意するに至る原體驗「四門出遊」の傳承をもとに、「實に生あるもののどもの定め」である死を克服するために修行し、その目的を達成して人びとにそこに至る道を説いたとし、「生天の往生を説くことが佛教に取入れられて、

後代の佛教のなかに大きな流れを形成した」ことこそ、釋尊の教えが社會全體にひろく浸透する原因となったとして、その可能性を考えている。

篇末のコラム、川俣海雄稿「閻魔王と徳道上人」。大和長谷寺の開基である徳道上人は、かつて病により生死の境を彷徨した折、冥府に至って閻魔と出會い、生前の惡業により地獄へ送られる者が多いので、觀音の功德によつて衆生を淨土へ導いて欲しいと告げられ、長谷寺本尊の造立を發願、總本山の開基となったとのこと。中國で同じく地獄に行つた敦煌出土の道明和尚の話と類似し、年代的にも近いことが注目される。

境界篇には九本の力作が並ぶ。その冒頭は本學會理事淺野春二稿「天に昇るための切符―道教の死者救濟儀禮における『昇天券』をめぐる―」。その耳慣れぬ券とは死後に天に昇るためのおふだである。道教の儀禮が整えられると、喪葬儀禮の詳細を記した儀式書が作られ、宋代では亡魂の召魂に用いる昇天券でわら人形も使うと

する。生者用の昇天券もあり、それは修業成就して仙人として昇天する者に與えられる由。仙人といえども券がないと天の門をくぐれず、現世同様の文書手續が必要であるとはいかにも漢民族らしい。

次にもう一本菊地章太稿「よみがえる神々の餐宴」。本稿は唯一の西歐に關する論考で美少年アドニス之死と再生から生まれた、春に開かれる女性だけの祭アドーニアで作られる、プラトンも紹介した「アドニスの庭」の祭の記憶が、キリスト教社會のもとでも生き延び、死んでよみがえる神の記憶が後にキリストの復活祭にもつながつたと指摘する。

續いて藤田祐俊稿「修驗道にみる死者の世界―出羽三山における死者の世界―」。日本独自の山嶽宗教、修驗道では登拜修行が中心となるが、筆者は出羽三山の入峯修行「秋峯」「夏峯」について、それが擬死再生の儀式でもあり、山中での參拜や護摩行などにより、行者の成長過程が構成されていることを解明し、擬死は新しい命の始まりであると論じる。

それに次ぐ伊藤聖健稿「九想圖と九想詩―變わりゆく死體が發するもの―」。人間の死骸が腐敗し白骨となり土灰に歸するまでの九つの姿が九相（想）で、その有様を描いた九相圖が多數存在し、空海には「九想詩」がある由。中國では唐の包佶の「觀壁九想圖」と題する詩がある他、敦煌からは「九想觀詩」も出土している。またキジル石窟やトヨク石窟には不淨觀想圖があるという。筆者は九相の日本での展開を重視しているが、いずれも中國起源とみなすべきで、日本では地獄圖となろう。

續いて風間弘盛稿「天皇葬儀の佛式化をたどる」。天皇の佛式葬儀のはじまりを天武帝とし、火葬のはじまりは持統帝で、次第に薄葬化と佛葬化が進み、僧が葬儀に關與した事實を略述。天皇家の菩提寺も定められ、泉涌寺が大きな役割を果たして、明治維新まで天皇葬儀の佛敎化が進んでいたことを教えてくれる。

次は品田泰峻稿「冥婚―青森縣津輕地方に見られる死者供養としての『冥福の結婚』―」。その風習は中國はじめ各地に存在するが、筆者は地元の津輕を中心に調べ、

その風習が昭和三十年代にはじまるとの情報をもとに、金木町の川倉地藏堂に祀られた地藏と人形堂に納められた人形について分析、津輕の地藏信仰は死者が今も生き續けている感覚が、そうした供養の風習を生んだとする。今後地域を擴大して調べたなら、淨土信仰が盛んな地域では冥婚がほとんど存在しないことが判明しよう。

更に石井祐聖稿「日本人の靈魂觀と眞言宗の葬送儀禮」。衆生を導いて佛の悟りの世界に誘うという引導が、現在は「死者を導いて成佛させる」という意味に解釋されるなど、儀禮の内容に「現代的」な解釋がおこなわれているのは、眞言宗に限らず他宗派でも同様である。枕經の際の幡や法具の圖は興味ぶかいが、日本人の死生觀の變質と共に、今では葬儀を「故人との別れの儀式」とみなす人が多數派であるという指摘には考えさせられる。續く加藤弘詔稿「臨死體驗と佛敎瞑想の關係―科學的視點から―」。キューブラ・ロスの臨死體驗の研究は立花隆の紹介によつて知られるが、筆者は臨死體驗が「死後の世界」への訪れか、脳内の生理現象であるのか、

ウェブサイトの公開資料にもとづいて考察し、禪定（瞑想）修行の過程で得られるという神通力、淨土の瞑想、チベット佛教の瞑想などと比較、それがヨーガやキリスト教神秘主義のトランス状態との類似点も多いことを指摘して、臨死體驗に共通する明晰で清澄な變性意識状態は、佛教瞑想の深化によって到達する「三昧」に近いとし、更なる科學的研究の必要性を提唱して誠に興味ぶかい。今後の研究の進展に期待したい。

本篇の最後は松崎慈恵稿「死者世界の功利主義的考察」。日本人の考えてきた死者の行く先として、①行先はなく消滅する。②この世とは別の世界に行く。③輪廻轉生してこの世の別の生物か人間になる。④目には見えぬが、この世界のどこかにいる。という勝田の四分類を引き、「ISSP 國際比較調査」において現代の日本人は意外に死後の世界の存在を信じていることに注意している。その上で日本人の祖靈觀と六道輪廻、極樂往生についてふれ、山中他界觀、海上他界觀など多様な他界觀の存在をあげた上で、還相廻向がひとつの答えになり得

る可能性を示唆していることは注目値する。

冥府篇・境界篇に續く現世篇であるが、同篇所收の論文の大部分は近現代の問題に關するもので、死生學の觀點からは興味ぶかいものではあるが、本評では題目のみあげておく。

宗教系大學生の大陸派遣と「死者の世界」 寺山賢照

死に際の作法 田中杏珠

旅立ちの瞬間 三浦聖令

死者を送り出す「死化粧」としてのエンバーミング

渡邊永信

多様化する墓 守 祐順

死者となったペット 渡邊隆正

慰靈が「聖性」をつなぐとき 星野 壯

本篇篇末所收の田中文雄稿「死者の歸宅日―中元・盂蘭盆の信仰と習俗―」は佛教のみならず道教とも關連するので考察の對象としたい。筆者は盂蘭盆の起源につい

て従来の諸説を紹介するとともに、中國撰述の經典である『孟蘭盆經』の全文を引いて、釋尊の弟子である目連が神通力を得て、亡母が没後に餓鬼道に墮ちて苦しんでいるのを發見し、師の教えにもとづいて供養のために孟蘭盆を始めた、というその内容を略述している。

しかし、唐代はじめにインドに留學した、玄奘（六〇二—六六八）も義淨（六三五—七一三）も孟蘭盆に關しては何も述べていない。歸國した三藏法師玄奘が長安の大慈恩寺などで、インドから持ち歸った經典の翻譯をおこなった折に、その作業に参加していた玄奘が編んだとされる『一切經音義』には「烏藍婆拏」という單語が收録されていることは確かであるが。

『孟蘭盆經』の最も古い注疏とされる慧淨（五七八—六四五）の『孟蘭盆經讀述』に孟蘭盆の語についての説明があることからすれば、その疑經が編まれたのは六世紀なかばの頃までではないかと考えられ、竺法護が譯したのではないことは確かである。

唐代にイスラム教の浸透を嫌った裕福なペルシヤ人や

ソグド人たちが、はるばる中國に移住して來たことは周知のとおりであり、珍しいものの喩えとして「窮波斯」（貧乏なペルシヤ人）という表現さえ存在した。田中師は中國に移住したゾロアスター教徒のソグド人たちが、故國を偲びつつ盛大に催した、ウルヴァン（urvān）と呼ばれた魂祭が、道教の七月十五日に行われた中元節と同時期に開催されているのを見聞し、それに危機感を覺えた佛教側が、先祖を供養する行事としてはじめたのが孟蘭盆であるとする、岩本裕説を紹介されているので、その説について検討をくわえたい。

世界最古の啓示宗教であるゾロアスター教には、當然のことながら死後の世界についての信仰が存在し、身體を離れた靈ウルワン（urvān）は、三日間地上に留まった後、地上を支配した最初の王にして最初に死んだ人間でもあるイマ（Yima）——サンスクリット語ではヤマ（Yama）——が支配する地下の死者の國に向かう、と信じられていたらしい。そして「分離の橋」あるいは「收集の橋」とされるチンワト橋は、現世と來世のつなぎ目と

なる境界であり、肉體を離れた魂はかならずその橋を渡らなければならないとされていた。ただしウルワン（ウルヴァン）と稱する宗教行事が同教に古くから存在したかはさだかではない。岩本説は中國でのゾロアスター教と佛教の接觸を想定しているが、北インドに浸透していた同教が大乘佛教と唐代以前に接觸していた可能性も否定できない。ともあれ、火と水の重視をはじめ、ゾロアスター教の教義がそれより新しい他の宗教に與えた影響については今後さらに考究されるべきであろう。

以上、紙幅の関係もあり十分に論じ盡せず、現世篇を素通りしてしまったが、現代の問題を取りあげていて興味ぶかく、本書の意欲的かつ學際的な取り組みは稱賛に値する。死生學の觀點からは介護學や看護學の關係者にも一讀をすすめたい。また圖版が多く收められていることも評價に値する。

最後に、本書の書題に「冥府」が使われて、「地獄」が採用されていない理由をつけ加えておきたい。それは

佛教の六道輪廻の過程において、地獄道の上には餓鬼道、その又上には畜生道が存在すると考えられていたからで、「地獄」だけでは佛教の冥府全體を表現できないが故にある。

今や世界の各地にまで設置されている監視カメラは、さながら淨玻璃鏡の如くに我々の行動を視ており、ビッグ・ブラザーが閻魔王の役を務めて、「罪」を裁くのであろうか。しかしその前に世界の指導者を自認している、「偉大な」リーダーの多くが、實は地獄に墮ちるべき人々であるようにすら思われる。唐初の蕭瑒が廢佛論者の傳奕に投げかけた「地獄の設くところ、まさに此の人の爲にあり」という一言の該當者があまりにも多過ぎることを嘆じつつ、本書が世界有數の長壽國となりながら、「死のレッスン」すら忘れてしまいつつある現代人にひろく一讀されんことを望んでやまない。

（ノンブル社、二〇二三年三月刊、本體價格八五〇〇圓）

註

- (1) ロビン・ダンバー、小田哲譯『宗教の起源 私たちにはなぜ〈神〉が必要だったか』（白揚社、二〇二三、原著二〇二三刊）
- (2) メアリー・ボイス、山本由美子譯『ゾロアスター教 三三〇〇年の歴史』（講談社學術文庫、二〇一〇、原著新版二〇〇一刊）
- (3) エドワード・ブルック・ヒッチング、藤井留美譯『地獄遊覧―地獄と天國の想像圖・地圖・宗教畫』（日経ナショナルジオグラフィック、二〇二三、原著二〇二一刊）
- (4) 『舊唐書』卷七九、傅奕傳。

寄稿規程

編集委員会

一、寄稿者は本學會員に限り、必ず完全原稿でお願いいたします。二、枚数制限は以下のとおりです。

論考 四百字詰四十枚程度
研究ノート 四百字詰二十枚程度
書評・新刊紹介 四百字詰十枚程度
国際學界動向 四百字詰十枚程度
なお、論文・研究ノート寄稿の場合には、左記の要旨を添付してください。

○外国語による要旨

要旨の作成は原著者に一任いたしますが、編集委員会が校訂する場合があります。外国語は原則として英語とし、語数は三百語程度とします。中国語表記は拼音（ピンイン）方式、あるいはウェード方式でお願いいたします。

○外国語による要旨の日本語原文

三、寄稿に際しては、「原稿整理票」に必要事項を記入し原稿とともに送ってください。「原稿整理票」の書式は學會ホームページからダウンロードすることができます。

四、本誌に掲載された原稿は、発行より三年経過した後にウェブ上にて公開されます。ウェブでの公開を承諾されない方は寄稿時にお知らせ下さい。

なお公開される場合も著作権は執筆者にあります。

五、原稿締切は、一月二十日、六月二十日といたします。

六、内容は未発表のものに限り、採否は當學會に御一任ください。七、抜刷はPDFファイルおよび印刷冊子三十部まで無償。それを超える部数は御希望の場合は、費をいただきます。

八、特殊製版（圖版・寫真版など）、組み替えなどの費用は寄稿者の負擔となります。

送附先

日本道教學會事務局
E-mail: info@taoistic-research.jp
*郵送の場合は當學會ホームページ上の連絡先に
送り下さい。

URL: <https://www.taoistic-research.jp>